

【以善会レポート】第一〇弾

斎田茂先の歴史研究

Ⅱ 「公家譜牒」と『掛川誌稿』Ⅱ

中山正清

はじめに

斎田茂先といえ、掛川藩領を中心とした地誌『掛川誌稿』の編者として知られています。しかし「斎田君墓銘」によれば、茂先は『掛川領志』（『掛川誌稿』のこと）だけでなく『公家譜牒』（『掛川市史 中巻』は『太田家譜』と意識）の編纂にも携わっています。

墓銘は、『金石跋』二巻の著書もあると記しています。『金石跋』は現在に伝わっていないように具体的な内容はわかりませんが、金属や石など紙以外の素材に記された文（墓碑、鐘銘、銭文など）について何らかの形でまとめたものでしょう。

大名や旗本の家譜は、寛政十一年（一七九九）から編纂が始まった『寛政重修諸家譜』に提出するために、各家でまとめられました。地誌は享和元年（一八〇一）から幕府による編纂が始まり、諸藩などでも編纂が進められました。金石文の研究は十八世紀後半から盛んになっています<sup>1</sup>。

十八世紀後半から十九世紀初めにかけての歴史研究の動向に沿って、茂先の研究も進められていたのです。

### 一、太田資愛墓誌

まず、掛川藩主太田資愛（一七三九〜一八〇五）の墓誌をめぐって示された斎田茂先の考えをみてみます。資愛の死去後の文化二年（一八〇五）二月二十一日に松崎慊堂（一七七一〜一八四四）が資愛の墓誌を記したのですが、茂先の意見を新藩主の資順（一七八三〜一八〇八）が採用して一部を書き換え、天保三年（一八三二）になって慊堂が元に戻しました。慊

<sup>1</sup> 『新版角川日本史辞典』（角川書店、一九九六年）「金石文」項。

堂の「故掛川城主従四位下侍従備中守太田公墓誌」<sup>2</sup>にこの間の事情が記されています。

この「墓誌」は題名に続けて「代。旧作ニ懸河<sup>1</sup>。出ニ於齋田茂先議<sup>1</sup>。今改」つまり「(慊堂が資愛の後継者である資順の)代りに記した。もとは齋田茂先の意見によって懸河と書いてあったが、今(掛川という表記に)改める」とあります。

茂先は『掛川誌稿』に「東鑑以来国初以前ノ金石文ニ経見スル所、皆懸河ノ字ニ従ヒ伝馬御朱印ヨリ寛永ノ頃マテハ、大概懸河ニ作レリト<sup>3</sup>」と、国初(江戸幕府の開幕)以前の金石文を見ると寛永(一六二四〜四四)のころまでは「掛川」ではなく「懸河」の文字を使っていたと記しています。つまり、茂先の主張は、「懸河」の方が古くから使われた由緒ある表記だというものでした。

また、「墓誌」の文末には、次のような意味の文が載せられています。筆者による大意を示します。

右の墓誌は、余(慊堂)が書いて提出したとき、近習の齋田茂先はすこぶる故事を知っていて公(資順)に官位を書き直すように申し上げた。公がこの意見を採用したので、余はそれ以上主張せずに退出した。今になってこの件について考えてみると、官名は実体のあるものではない。ただ、その人の好み、その家の習いによって「〇〇守」「〇〇正」と名乗っているにすぎない。さらに、「掛川」を「懸川」と記するのは、字面の上品さによるもので、しきたりに従うという実用性を忘れていて、はなはだものごとを損なうことである。今、朱筆を入れて、後人が悪い例に従わないようにした。

慊堂が記した資愛の墓誌案をみて、茂先は「掛川」の文字を「懸河」または「懸川」と改め、また、幕府の役職(京都所司代、加判列(老中のこと)など)ではなく朝廷の官職(従五位下備後守、従四位下侍従など)を優先するように主張し、藩主の資順がこれを採用したのですが、茂先の死

<sup>2</sup> 『松崎慊堂全集』(冬至書房、一九八八年)巻十。

<sup>3</sup> 『掛川誌稿 全翻刻』(一九九七年、発売元静岡新聞社)二十五頁。

後、慊堂は茂先の見解を退けて書き直したのです。

藩校教授である慊堂の記した墓誌に茂先が手を入れたのは、茂先が屋代弘賢（一七五八―一八四一）のもとで研鑽に励んだ自信と、その学識を評価していた資順の信頼によるものでしょう。茂先が懸川、従四位下侍従のように古い表記を重視したのは、茂先が国学者である屋代弘賢の弟子であり、日本の古典を重視する国学者としての主張だったように思われます。

## 二、『公家譜牒』

### ア、『寛政重修諸家譜』のための編纂か

次に、齋田茂先が何らかの過失で左遷されていたときに携わったと「齋田君墓銘」が記している『公家譜牒』についてみてみます。『公家譜牒』は主家太田家の家譜といった意味で、『掛川市史』は『太田家譜』と意識しています<sup>4</sup>が、他にも『太田家譜』やそれに似た書名のものがいくつもありますから、本稿では「墓銘」の記すまま『公家譜牒』と記します。

太田家は何のために『公家譜牒』を編纂したのでしょうか。幕府は寛政十一年（一七九九）に大名・旗本の系譜集である『寛政重修諸家譜』の編纂を始め、文化九年（一八一二）に完成させています<sup>5</sup>。太田家の『公家譜牒』は『寛政重修諸家譜』用に提出するためのものだったと推測できます。この頃の茂先は二十代後半から三十代に当たり、積極的に調査できる年齢でした。

ただ、『公家譜牒』そのものは見付けることができません。また、『寛政重修諸家譜』は、各大名・旗本から提出されたものに幕府の担当者が手を入れていたので、『寛政重修諸家譜』の太田家の記述のうち、どこまで茂先の記述が反映されているかもわかりません。

とはいえ、「齋田君墓銘」が「公家譜牒ヲ掌（つかさど）リ」と記しているからには、茂先が編纂の中心だったことは推測できます。何らかの過失があったとしても、屋代弘賢門下である茂先に代わり得る人材が藩内に

<sup>4</sup> 『掛川市史 中巻』（掛川市、一九八四年）九百八十二頁。

<sup>5</sup> 前掲『新版角川日本史辞典』「寛政重修諸家譜」項。

いかなかったため、茂先は『公家譜牒』編纂に中心的な役割を果たしていたのではないでしょうか。

以下、『寛政重修諸家譜』の太田家の記述<sup>6</sup>は茂先らの原稿がほぼ採用されたと仮定して、その特徴をみていきます。

## イ、太田道灌

### a、具体的な記述の『寛政重修諸家譜』

江戸城を築き文武両道の名将とされる太田道灌（資長、一四三二～八六）は、太田家としては最も誇らしい祖先だったはずです。神奈川県伊勢原市の大慈寺には、資順が絹地に道灌の肖像を描き資愛が道灌が詠んだとされる和歌を添えた『太田道灌画像』（伊勢原市指定文化財）があり<sup>7</sup>、ここからも後世の太田家が道灌を慕っていたことをうかがうことができます。

この道灌について、『寛永諸家系図伝』<sup>8</sup>と『寛政重修諸家譜』の記述を比較してみます。

『寛永諸家系図伝』は、掛川藩太田家の祖である太田資宗（一六〇〇～八〇）が編纂の奉行だっただけあって、太田家の歴代について詳しく記述していて、道灌についても多くの文字数を費やしています。そこには江戸城、政治力、歌道などについて記されていますが、多くが抽象的な表現です。これに対し、『寛政重修諸家譜』も江戸城、戦功、歌道などについて記していますが、いずれも具体的です。

『寛永諸家系図伝』は江戸城については比較的具体的で、「常に武州江戸の城に住す。城内に閑居の室を立て、静勝軒と名付く。その西に望めば不盡の雪を見る。其窓を名付けて含雪といふ。江のほとりに小亭をたて、泊船と名付く」（読みやすいように、筆者が適宜漢字を当てた。以下の引

<sup>6</sup> 『新訂寛政重修諸家譜 第四』（続群書類従完成会、一九六四年）三百六十九～三百八十二頁。

<sup>7</sup> 伊勢原市ホームページ『いせはら文化財サイト』。

<sup>8</sup> 『寛永諸家系図伝 第三』（続群書類従完成会、一九八〇年）三十五～四十六頁。

用文も同様）とあります。

一方、『寛政重修諸家譜』は、静勝軒、含雪、泊船のくだりもあります。が、その前に「其城の形、子城、中城、外城あり。石をもつて墻となし、塁の高さ十余丈、懸崖そびえ立、其めぐり数十町、溝塹泉脈を通ぜり。鉄をもつて張れる門二十五あり」などと、堅固な名城だったことをより詳しく記しています。

政治・軍事については、『寛永諸家系図伝』は「(道灌の主君の扇谷上杉) 定正深く是(道灌のこと)に任して、よろづ大小となく道灌に問い聞く。関東の諸家心を道灌に寄せずといふ者なし。関西の諸将も其風を聞いて、靡き従ふ者又多し」とだけ記していて、具体的な出来事には触れていません。

『寛政重修諸家譜』の場合は、今川義忠死後の今川氏の内紛への介入、上杉氏と対立した長尾景春との対戦などについて合戦の年月日、戦果など記していて非常に具体的です。

和歌について『寛永諸家系図伝』は「和歌を好む」「その詠める所の家の集二十一巻、其類をわけて碎玉類題と号す」「江戸の城に於ひて心敬等を招き寄せて、和歌の会を催す。是を江戸歌合といふ」のように記されています。

これに対し『寛政重修諸家譜』は、歌集については「資長が歌集碎玉類題十一巻今亡ぶ。平安紀行一卷、花月百首一卷、江戸歌合一巻今みな伝われり」と、散逸したものと残っているものをそれぞれ記載しています。また、道灌が上洛したときに御花園天皇から武蔵野や都鳥について尋ねられ、道灌が「露置かぬかたもありけり夕立の空より広き武蔵野の原」「わが庵は松原続き海近く富士の高嶺を軒端にぞ見る」「年ふれど我まだ知らぬ都鳥隅田川原に宿はあれども」と答えたこと、具体的に和歌を示して記しています。

道灌の死について、『寛永諸家系図伝』には「文明十八年七月廿八日、相州糟屋定正が館に入て卒す」とだけあります。一方、『寛政重修諸家譜』は「山内顕定、扇谷定政が兵威を挫かんがため、人をして道灌を讒せしむ。これより定政、道灌を疑ひ、七月二十六日相模国糟屋の館に於いて殺害せ

らる」と、道灌が殺害された背景も記しています。

以上のように『寛政重修諸家譜』は非常に具体的ですが、そのためには出典があったはずであり、编者つまり斎田茂先らは軍事、和歌等に関する多くの文献にあたったことが想定されます。『群書類従』などの編纂にかわり、自らも蔵書家として知られた屋代弘賢に師事した茂先が、弘賢やその周辺の人達の手助けを借りて、太田家に関する文献を探し出していたことが、想像できるでしょう。

#### b、採用されなかった山吹の説話

太田道灌といえば、山吹の説話が有名です。狩りの途中で雨に降られた道灌が、蓑を借りようとする一軒家に寄ったところ、出てきた少女が「七重八重花は咲けども山吹の実のひとつだになきぞかなしき」と詠んで引っ込んでしまいました。道灌はその意味がわからずに怒って引き上げたのですが、家来が「少女の詠んだ歌は、山吹というのは美しい花を咲かせるのですが、実がなることはありません。『実のひとつだになき』というのに掛けて、蓑が一つもないと言いたかったのです」と説明すると、道灌はおのれの無学を反省して、和歌の道に励んだという話です。

しかし、この話は『寛永諸家系図伝』にも『寛政重修諸家譜』にも載せられていません。広く流布したとされる『常山紀談』（元文四年へ一七三九）成立）には掲載されています。から、斎田茂先らもこの話を知っていたはずですが。

山本和明「七重八重花は咲けども……」『太田道灌雄飛録』にみる物語化の（論理）<sup>10</sup>は、「十八世紀初頭までは、少なくともまだ（※山吹の歌と）道灌と結び付いていなかったとしてよいのではないだろうか」と記しています。同論文の筆者の調べでは、正徳二年（一七一二）の自序のある

<sup>9</sup> 湯浅常山著、森銃三校訂『常山紀談 上巻』（岩波文庫、一九三八年）三六〇～三七七頁。

<sup>10</sup> 『国文学研究ノート』（神戸大学「研究ノートの会」、一九九一年）所収。

『和漢三才図会』で初めて、道灌と山吹の歌のエピソードが登場するとい  
います。

『寛政重修諸家譜』がこの説話を採用しなかったのは、同論文のよう  
な考証を齋田茂先あるいは幕府の編纂官が行ったためではないでしょうか。  
合理的な思考のもとに編纂されていたことがうかがわれます。

### c、「太田資武書状」の入手

次に、『寛政重修諸家譜』には間に合わなかったものの、貴重な書状を  
茂先が入手したことを紹介します。もう数年早く入手できていれば、必ず  
や同書に反映されたであろう史料です。茂先による史料収集活動の一端も  
うかがうことができます。

練馬郷土史研究会編集の『太田氏関係文書集 第四』<sup>11</sup>は、「齋田茂先  
本」として二通の太田資武書状を載せています。一通（文書番号一三三）  
は資武の父の資正（三樂齋）、もう一通（一三四）は道灌の事績について  
記しています。二通とも太田資宗宛てで年未詳です。

『太田氏関係文書集 第四』所収の前島康彦「太田安房守資武書状に  
ついて」によると、資武書状の末尾に以下の識語があると記しています<sup>12</sup>。

房州書状二通今在小川坊（彦十郎殿事）秘庫 壬申春日使侍臣尊慕之  
所賜也

茂先

文化甲戌七月朔、以齋田茂先本伝写

中山信名

つまり、彦十郎という者が秘蔵していた資武の書状二通を、壬申（文  
化九（一八一二）年）に春日使侍臣が写し、それを茂先が賜り、さらに文

---

<sup>11</sup> 『太田氏関係文書集 第四』（練馬郷土史研究会、一九六四年）。

<sup>12</sup> 三十頁。

化甲戌（十一年）に中山信名が写した、とあります。「太田安房守資武書状について」は、この茂先について「当時水戸藩に仕えていた」と記しています<sup>13</sup>。『水府系纂総目録』<sup>14</sup>に齋田姓の四人の名前があり、水戸藩士に齋田氏がいたことは確かです。しかし、掛川藩士の齋田茂先が太田家の家譜編纂に従事していたのですから、ここに記されている「齋田茂先」は掛川藩士の齋田茂先とすべきと考えます。

「太田資武書状」を秘蔵していた彦十郎も齋田氏ということですが、どんな人物かはわかりません。書状を写した春日使侍臣というのは持明院家の家司だと推測できます。「春日使」は春日大社の祭礼である春日祭に遣わされた勅使で、藤原氏の近衛中少将があたりられました。持明院家の当主は代々近衛少将や中将を務めていますから「春日使」は持明院家の当主であり、この当主が書道の弟子で太田家の家臣である茂先に贈ったと考えられます。

書状の宛先は掛川藩主太田家の祖の太田資宗ですから、茂先は主家の太田家から失われていた書状を入手したことになります。しかし、『寛政重修諸家譜』は文化九年十一月に編纂の総裁堀田正敦の序文があり、この時点で完成したといえます。茂先が書状の写しを入手できたのが同年七月ですから、同書に書状を反映させるのには間に合わなかったのでしょう。茂先から書状を写させてもらった中山信名（一七八七～一八三六）は、常陸出身で塙保己一に入門した国学者です<sup>16</sup>。同じ保己一門下である屋代弘賢の伝手で、茂先から写させてもらったのだと推測できます。

#### d、間に合わなかった「当方滅亡」

この「太田資武書状」、特に道灌の事績について記した一通（文書番号一三四）には、道灌の死について興味深い記述があります。以下に原文を

<sup>13</sup> 三十一頁。

<sup>14</sup> 国文学研究資料館データベース。

<sup>15</sup> 前掲「太田安房守資武書状について」三十一頁。

<sup>16</sup> 『日本史人物辞典』（山川出版社、二〇〇〇年）「中山信名」項。

示します。

一道灌ハ文明十八年丙午七月廿六日五十五歳にて還行之由、慥被為聞之段被仰越、拙者右申進候も其通に御座候。扱又、死去之正説ハ、風呂屋にて風呂之小口迄被出候時、曾我兵庫と申者太刀付、被切倒なから、当方滅亡と最後の一言。其時代ニハ都鄙以無隠由、親度々物語仕候。

彼曾我兵庫ハ、道灌重恩ヲ為蒙にて御座候へとも、官領方之貴命無扨故歟、右之仕合に候。道灌如一言、扇谷御家も無時刻相果、河越も属北条之手ニ申候。此物かたり、少々詞も難述、長き事にて御座候、存通ハ不被申候事。

つまり、道灌は扇谷（定正）が遣わした曾我兵庫によって風呂場で切られ、「当方滅亡」と言い残して息絶えました。そして、この言葉通りに当方（扇谷家）は間もなく亡んだ、ということです。

これを書いた資武について『藩翰譜』は、「三楽（※資正）が、後に常陸にてまうけし子、太田安房守（※資武）といふは、三河守殿（※結城秀康）に仕へて、越前国にあり、彼れ太田の嫡流にして、頼政より道灌に至るまでの系図、並ひに其家の重宝、悉く安房守が子孫の家に伝へたり」と記して<sup>17</sup>、道灌の嫡系の人物です。

こうした人物の証言で、しかも興味深い内容なので、茂先としてはぜひ『寛政重修諸家譜』に採用したかったでしょうが、間に合わなかったのです。

では、この書状を受け取った資宗は、『寛永諸家系図伝』編纂の奉行であったのに、なぜ反映されなかったのでしょうか。書状には年が記されていませんが、前掲のの前島康彦「太田安房守資武書状について」は、「寛永十六、十七年から廿年までの間に認められたものとみてよい」と考察し

<sup>17</sup> 『校刻藩翰譜 卷三』（吉川半七、一八九六年）三十一〜三十二頁。

ています<sup>18</sup>。寛永十八年に着手、同二十年に完成した『寛永諸家系図伝』には間に合わなかったのかもしれない。

なお、資武の父の資正（三樂齋、一五二二～九一）は武勇の誉れ高く、扇谷上杉氏の重臣で武蔵岩槻城主として北条氏康や武田信玄と戦いましたが、永禄七年（一五六四）の国府台の戦いに敗れて城を失いました。後に佐竹義重に属して武蔵奪還をうかがいましたが、天正十八年（一五九〇）に小田原の陣に豊臣秀吉を訪ね、翌年死去しました<sup>19</sup>。

前掲「太田安房守資武書状について」によると、紀州藩主徳川頼宣（一六〇二～七一）の要望によって、資正の事績について資宗が資武に問い合わせ、その回答がこの書状ということです<sup>20</sup>。

書状を記した太田資武（一五七〇～一六四三）は、常陸の片野城主でしたが後に徳川家康の二男結城秀康に仕えて越前で死去しています<sup>21</sup>。『太田氏関係文書集』第四所収の前島康彦「岩付城主太田氏衰亡論」によると、資武の子孫は、貞享三年（一六八六）に越前藩を離れて浪人し、享保十六年（一七三一）に断絶したとみられるといえます<sup>22</sup>。

### e、道灌研究の現在

ここまでの太田道灌に関する本稿の記述は、あくまでも十九世紀前半の『寛政重修諸家譜』編纂段階のもので、史料の収集と史料批判の厳密化が進んだ現在では、『寛政重修諸家譜』の記述にも多くの疑問が提示されています。黒田基樹著『太田道灌と長尾景春』<sup>23</sup>によって具体的にみていきます。

まず、道灌の元服後の実名とされていた「持資」は「後世の創作とみ

<sup>18</sup> 二十七～二十八頁。

<sup>19</sup> 『戦国人名事典 コンパクト版』（新人物往来社、一九九〇年）「太田資正」項。

<sup>20</sup> 二十九～三十頁。

<sup>21</sup> 『戦国人名事典 コンパクト版』「太田資武」項。

<sup>22</sup> 四十～四十三頁。

<sup>23</sup> 戎光祥出版、二〇二〇年。

られる」といい、その後には名乗ったとされていた「資長」については「資長が道灌と同一人物であった可能性は、必ずしも否定しきれない。しかし、その花押型が道灌のものとは異なるため、同一人物と確定することができない状況にある」といいます<sup>24</sup>。

道灌のが和歌を嗜んだことについては、「道灌の作品と伝えられているものには、和歌集で①『慕景集』、②『異本慕景集』、③『花月百首』、紀行文で④『平安紀行』がある。これらのうち、①や④については早い段階から道灌の名に仮託した偽作、あるいはまったくの創作というのが共通の理解である。そのほかについては、意見が分かれていた状況もあったが、近年の研究によっていずれも偽作とみることによって決着がついている」となどと否定しています<sup>25</sup>。

また、道灌が上洛したことも、「道灌の上洛を示す確実な史料は、現在のところ一つとして存在していないというのが現状である」<sup>26</sup>とし、山吹の説話については前述しましたが、『太田道灌と長尾景春』でも「この話は子孫が作ったものではなく、まさに江戸の地域社会のなかで作り出されたものであることがわかる」と記し、史実ではないとしています<sup>27</sup>。

掛川藩主太田家と直接関係することでは、同書は「道灌から一、二世代については確実な史料が少ないため、その子孫の系譜については不明な点が少なくない」として、『寛政重修諸家譜』の道灌から重正までの系譜をそのまま信用していいわけではないことを示唆しています<sup>28</sup>。

つまり、江戸時代から信じられていた道灌像は、多くがフィクションだということです。とはいえ、多くの和書を集めた『群書類従』が完成（文政二年（一八一九））した頃、道灌の言動に関する史料を精力的に集め、取捨選択してまとめた齋田茂先らの仕事を、多くの史料を容易に閲覧でき、研究が積み重ねられている現在の水準からみてあげつらうべきでないのは

<sup>24</sup> 二十八～三十一頁。

<sup>25</sup> 二百七～二百八頁。

<sup>26</sup> 二百十九～二百二十頁。

<sup>27</sup> 二百十八～二百十九頁。

<sup>28</sup> 三十八頁。

いうまでもありません。

## ウ、家康の側室英勝院

太田家の系譜を語る上で忘れてはならない重要人物の一人に、家康の側室となった英勝院（於勝、於梶、一五七八〜一六四二）がいます。英勝院は太田康資の女で、掛川藩主太田家の祖である重正の兄弟。徳川家康の側室となり女子を産んだのですが女子は早世し、後に水戸藩主となる頼房の養母となった女性です<sup>29</sup>。神君家康の側室、水戸頼房の養母ですから、太田家の系譜を飾るのに欠かせません。斎田茂先は、この英勝院の年譜も手に入れていました。

愛知県西尾市の岩瀬文庫には、『太田家譜並法号録』として『御代々御来歴暨御法号』『道灌公小伝』『道淳公貴号考』『英勝院夫人年譜』『英勝院様御伝・太田家譜略鈔』が所蔵されています。このうち『英勝院夫人年譜』には本文末に「文化己巳冬稿」（文化六年（一八〇九）冬に原稿ができあがった）とあり、巻末に朱書で「壬申二月下浣令柴田耕蔵抄之晦前一日／茂先一校」つまり、壬申（文化九年）二月下旬に（茂先が）柴田耕蔵にこれを写させ晦日の前日に終え、茂先が本文と照らし合わせた旨が記されています。

また、明治二十年（一八八七）十月二十八日に旧掛川藩士の矢部潤が記した紙片も貼付されていて、そこには「右英勝院夫人年譜水士岡崎氏正忠所撰我藩斎田君茂先使門生膳而所自校者（以下略）」とあります。ここから『英勝院年譜』は水戸藩士岡崎正忠の著で、柴田耕蔵は茂先の「門生」（門下生）だったことがわかります。つまり、水戸藩の岡崎正忠が文化六年に著した『英勝院年譜』を、同九年に茂先が門下生の柴田耕蔵に写させたのです。

『寛永諸家系図伝』<sup>30</sup>『藩翰譜』<sup>31</sup>と『寛政重修諸家譜』の英勝院に

<sup>29</sup> 前掲『戦国人名事典 コンパクト版』「英勝院」項。

<sup>30</sup> 前掲『寛永諸家系図伝 第三』四十〜四十二頁。

<sup>31</sup> 前掲『校刻藩翰譜』三十二頁。

ついでに記述を比べると、関ヶ原の戦い（一六〇〇年）の際に英勝院が戦場まで家康のお供をし、勝利したことから名前を梶から勝に改めるようにと家康から命じられたエピソードなどが、『寛政重修諸家譜』で新たに加えられています。『英勝院年譜』にこれらの話は記されていませんから、『寛政重修諸家譜』の記述に影響を与えたというわけではないようです。とはいえ、太田家の家譜を充実させるため、可能な限りの史料を集めようとしていた茂先の熱心な姿勢をここにもうかがうことができます。

## エ、太田駒千代

### a、熱海旅行

次は、斎田茂先を含む一行が、わずか十二歳で無念の死を遂げた太田駒千代を“再発見”し、『寛政重修諸家譜』に採用されたことをみてみます。

松崎慊堂の「游豆小志」<sup>32</sup>は、太田資順の弟資言（一七八三〜一八一〇）らが文化五年（一八〇五）夏に伊豆国熱海に遊んだことを記しています。供は斎田茂先（当時の名は茂利）、松崎慊堂、長塩信方ら九人と医師二人の計十一人。

この文で慊堂は、資言のことを「含雪公子」と記しています。將軍の世子は江戸城西の丸に住んだのですが、道灌が江戸城の西に臨む建物を「含雪」と名付けたのにちなんで、掛川藩の世子だった資言をこのように呼んだのでしょうか。

さて、一行は四月十八日に江戸・西窪の藩邸を出発し、二十日に熱海に到着。温泉を楽しむとともに、釣りをしたり舟を雇って浦々の景観を眺めたり寺社を訪ねたりと、思い思いにくつろぎました。特に茂先の活動は活発で、初島に渡ったり、弦巻山の駒形堂にあった馬を刻んだ石の拓本を採ったりしました。

のどかな日々を過ごした後の五月九日、一行は同地にある医王寺の太田駒千代の墓に詣でています。駒千代は太田道灌の曾孫に当たる康資の息子で、永禄年中に北条氏康のために十三歳で殺されたと、「游豆小志」は

<sup>32</sup> 前掲『松崎慊堂全集』卷二十一。

記しています。五月十三日に熱海を発ち同十五日に西窪藩邸に帰りました。慊堂も資言が駒千代の墓に詣でたのに従って、「医王寺閨樹公墓」<sup>33</sup>という文も残しています。閨樹公というのは駒千代のことです。そこでは墓地について「木こりや牛飼いが勝手に入り込み、犬やウサギが歩き回っている」と、荒れ果てた様子を描写し、これを見た資言は「この日は惨めな気持ちで楽しむことはなかった」と記しています。

#### b、駒千代の「再発見」

この太田駒千代の名前は、『寛永諸家系図伝』や『藩翰譜』には登場しません。一方、文化九年（一八一二）完成の『寛政重修諸家譜』には、康資の長男「某」として載っていて、「永禄七年八月二十八日伊豆国熱海の医王寺にをいて北条氏康がために自殺す。年十二」とあります<sup>34</sup>。

『寛政重修諸家譜』によると、太田道灌の曾孫である康資（武庵、一五一六〜六六）は、北条氏康に属したのですが、永禄六年（一五六三）冬に氏康に背き、安房国の里見義弘に仕えました。駒千代は北条氏の領国である熱海に取り残されたまま北条氏によって死に追いやられたのです。駒千代の弟重正（一五六一〜一六一〇）は、父に従って安房に逃れ、後に徳川家康に仕えて掛川藩主太田家の祖となりました。

では、『寛政重修諸家譜』で初めて駒千代の名前が登場したのでしょうか。とすれば、資言の一行が熱海旅行で駒千代の存在を発見したことになるのですが、そうではありません。

正徳四年（一七一四）以前にまとめられた『太田家記』<sup>35</sup>には、太田

<sup>33</sup> 前掲『松崎慊堂』巻二十一。

<sup>34</sup> 前掲『新訂寛政重修諸家譜 第四』三百七十三頁。

<sup>35</sup> 国立公文書館デジタルアーカイブ。国立公文書館ホームページの『平成二九年度 第四回企画展 「太田道灌と江戸」』では『太田家記』を「一八世紀初頭に作成された編纂記録」としています。『太田家記』本文の後に付されている太田家系図には資順が藩主のときまで記されていますから、系図は十八世紀初めのものですが、本文の末尾に「一本 享保四己

康資の惣領の駒千代が学問のために熱海の医王寺にいたところ、康資が小田原の北条氏と手切れになったため、小田原から熱海へ討手を遣わし、駒千代は永禄七年八月二十八日に熱海で自害した、との記述があります。

同書には、康資の孫に当たる資宗の姉で井上政重に嫁した妙浩院が、安房に逃れた康資から駒千代に「早く逃げろ」という連絡がなかったため、駒千代は死ななければならなかったので、「駒千代様御当家ニ御崇被成候也」（駒千代様が太田家に祟っている）と仰せになった、とも記しています。

また、医王寺に駒千代の墓や過去帳があることを、宝永二年（一七〇五）に藩主太田資晴が熱海で湯治したときに確認したという記述も『太田家記』にあります。

しかし、太田家ではその後、駒千代のことは忘れられてしまったようです。慊堂の「医王寺閭樹公墓」にみられる墓地の荒廃、資言の受けたシヨックの大きさから、当時の太田家は駒千代のことを知らなかったと考えられます。また、資言一行が駒千代についてあらかじめ知っていて、その調査を目的に熱海に行ったとしたら、到着後すぐに医王寺を訪れそうなものですが、到着後二十日近く経ってから訪ねたということからも、一行は駒千代のことを知らずに熱海に行き、滞在中に知ったと考えていいでしょう。

茂先もその一員だった文化五年の熱海旅行は、駒千代を再発見したという意味を持っていたのです。

なお、岩瀬文庫所蔵の白井通気著『熱海温泉図考』には駒千代の「墳墓之銘」が載っていて、そこには文化五年八月に太田資順が墓を再建したとの記述があります。資言一行が江戸に帰って藩主の資順に報告し、それからすぐに墓が再建されたこととなります。

---

亥年七月中九日写之 此本書ハ正徳四甲午年六月上旬写被申候由」と記されていて正徳四年に写されていますから、成立はそれ以前ということになります。

### 三、『掛川誌稿』 ア、編纂の契機

次に、齋田茂先の最も知られた業績である『掛川誌稿』の編纂についてみることにします。後に『掛川誌稿』と呼ばれることになる地誌の編纂に掛川藩が着手したのは、藩主が資愛から資順（文化二年四月六日継嗣）に代わって間もない時期、文化二、三年（一八〇六、〇七）頃とされます。編纂を企てた時期や実際にスタートしたことを示す史料は見当たりませんが、文化三年に齋田小源太（茂先）らが家代、仁藤、下俣を巡村調査しており、『掛川市史 中巻』によると、これは地誌編纂のためということとです<sup>36</sup>。茂先は藩主に従って掛川城下に滞在している間、先頭に立つて巡村調査していたこととなります。

この巡村調査より少し前、享和三年（一八〇三）に幕府は昌平黌に地誌調所を設置して、「全国の各藩及び幕府各役所へ向けて地誌編纂に着手すべき意向を内々に伝えた」と、白井哲哉著『日本近世地誌編纂史研究』<sup>37</sup>は記しています。同書はその前提として、松平定信の「風土記」構想があったとも指摘しています<sup>38</sup>。

同書はまた、幕府の内命で編纂されたと確定・推定できる地誌として『新編会津風土記』『甲斐国志』『福山志料』など十八書を挙げています<sup>39</sup>。『掛川誌稿』はこの中に含まれていませんが、巡村調査の時期からみて、幕府の内命に依じて企てられたと考えることができます。

享和年間の掛川藩主は太田資愛。松平定信が老中を辞任した後も定信政権の方針を受け継いだ「寛政の遺老」の一人に数えられる人物です。また、資愛によって享和二年に召し抱えられた松崎慊堂は林述齋の弟子ですから、述齋による地誌編纂の企てをよく知る立場にあったはずとみられます。

とすれば、資愛―慊堂のラインで掛川藩の地誌編纂が企図されたとみる

<sup>36</sup> 九百七十五―九百八十頁。

<sup>37</sup> 『日本近世地誌編纂史研究』（思文閣出版、二〇〇四年）百四十二頁。

<sup>38</sup> 同右書百三十六頁。

<sup>39</sup> 同右書百六十一―百六十四頁。

ことができます。ただ、具体化する前の文化元年（一八〇四）に資愛は死去してしまい、慊堂は新設された藩校の運営に忙しかったことでしょう。そこで、地誌の担当者選ばれたのが、屋代弘賢門下の齋田茂先だったのです。それまで掛川藩とは何の縁もなかった慊堂よりも、譜代の藩士である茂先の方が藩領のさまざまな事柄に詳しいという事情も考慮されたのかもしれません。

このように、『掛川誌稿』編纂の立案に慊堂が深く関わっていたと考えれば、茂先死後にその仕事を受け継いでほぼ完成させた山本忠英の死（一八二六年）後、文政十三年（一八三〇）十一月四日の「篠田三平来たり、掛川志稿を対読す」の記事から天保十年（一八三九）四月八日に「掛川志稿（十三・十四）を校しおわる」まで、慊堂が『掛川誌稿』の校閲に取り組んだ<sup>40</sup>ことも理解しやすくなります。自らが企画に関与した事業だからこそ、担当者である茂先と忠英の死後は自らが完成させる責任があると考えて、多忙な中でも校閲に励んだのでしょうか。

なお、林家の門人帳『升堂記』<sup>41</sup>によると、文化八年一月十六日に「松崎退蔵口入」つまり松崎慊堂の紹介で「太田丈三郎内 斉田小源太」（太田資始配下の齋田茂先）が入門しています。

これは、『掛川誌稿』編纂事業の一環として、昌平黌の地誌編纂作業を学ばせるためと考えられるのではないのでしょうか。慊堂が藩の地誌編纂に関わったことを記したものは、前述の校閲の記事しか見当たらないのですが、それ以前から必要に応じて協力していたことになりました。

『掛川市史 中巻』は、將軍家斉が文化七年（一八一〇）昌平坂学問所に地誌局を設け、文政七年（一八二四）に『新編武蔵国風土記稿』が完成したことをもって、『掛川誌稿』の編纂開始は幕府の地誌編纂よりは先行していた」と記しています<sup>42</sup>。しかし、完成時点と開始時点を比べるの

<sup>40</sup> 『掛川誌稿（全）』（名著出版、一九七二年）「あとがき」八百九〜八百十頁。

<sup>41</sup> 『升堂記（東京大学史料編纂所所蔵）翻刻ならびに索引』（関山邦宏、一九九七年）。

<sup>42</sup> 九百八十六頁。

は明らかなき誤りであり、また、前述のように享和元年（一八〇一）に林述齋の建議を契機として掛川藩が地誌編纂事業に着手したのであれば、幕府に先行していたということとはできません。

#### イ、 精力的な古文書・金石文の調査

『掛川誌稿』をざっと読んで気が付くことは、『万葉集』『延喜式』『和名類聚抄』『吾妻鏡』『宗長手記』といった多くの書に目を通して見るとともに、古文書、金石文、口碑も積極的に収集して記述に利用していることです。

いくつか例を挙げれば、巻一の「佐野郡」では『新撰姓氏録』『旧事本紀』『続日本紀』『万葉集』『延喜式』『和名類聚抄』のほか、長享五年の大悲山の金鼓（鉦）と天文十九年の下西郷神宮寺の金鼓の銘文、慶長十一年の紺屋町了源寺の顕如上人肖像の裏書にみえる「佐野」（佐夜、佐益）の表記を挙げて。「誤テ佐乃ト訓スルハ近世ノ事ナリ」（「さの」と読むのは最近のことである）と結論付けています<sup>43</sup>。

巻四の「山口郷」では、永正十七年と天文六年の白山鰐口、天正十七年の御朱印定書、慶長九年の千羽村検地帳、元和八年の慶雲寺証文、明応五年の長松院文書を参照し、山口郷の範囲を「西ハ馬喰村ヨリ以東駅路ノ左右、佐野ノ中山菊川ニ至ルマテノ諸村」だと断じています<sup>44</sup>。

このほか、後述するように二代將軍徳川秀忠の生母である西郷局に関しては地元（上西郷村）の口碑を中心に考察しています。

前述したように茂先が巡村調査すべてを行ったとは考え難く、史料の収集を熱心に行った巡村調査の従事者、各村の史料所蔵者などの協力があってはじめて、このような緻密な記述ができたのです。とはいえ、協力者の集めたものを含む多くの史料に当たってまとめた茂先の仕事は、高く評価されるべきと考えます。

<sup>43</sup> 前掲『掛川誌稿 全翻刻』十八頁。

<sup>44</sup> 同右書、九十七頁。

## ウ、西郷局の記述

茂先は『掛川誌稿』の巻首から巻六まで、つまり総説から佐野郡までをまとめたのですが、四十二歳の働き盛りで亡くなってしまいました。その後は山本忠英が受け継いで巻七から巻十四までを編纂するとともに、巻六までについても茂先編纂個所とは異なる見解がある場合は「附録」として自らの見解を示しています。

『掛川誌稿』の中で茂先が最も多く触れている人物が西郷局で、また、山本忠英による「附録」も西郷局についてかなりの分量を記していますから、ここで両者の記述をみてみたいと思います。

茂先は巻二で日根上郷の説明と、上西郷村（現掛川市上西郷）の五社明神、曹溪山法泉寺、西郷齋宮故宅、鬢セカ谷の各項で西郷局に触れています<sup>45</sup>。

このうち西郷齋宮故宅（現在のの上西郷の構江地区）の項で「按西郷氏ハ世々三州ニアリシカ、イツノ頃ヨリ此ニ移居セシカ詳ナラス」「台徳大君（※徳川秀忠のこと）ノ御産母西郷局ト申セシモ、西郷氏ノ女ニテアリシトイヘハ」と記しています。つまり、三河の西郷氏がいつの頃か上西郷村に移住したのだと考えられ、秀忠の生母西郷局も西郷氏の娘だといわれている、というのです。

また、曹溪山法泉寺の項では、「即西郷齋宮ト云ヒシ人ノ夫婦ニテ、西郷局の双親ナルニヨリ」と、西郷齋宮という人の夫婦は西郷局の両親だとしています。

まとめれば、三河西郷氏の一族が上西郷村に移住し、その西郷氏から西郷局が生まれたということになります。茂先は西郷齋宮故宅の項で「此西郷氏ノ事蹟ハ、其家ニ存スヘケレト、唯俚俗ノ伝説ヲ記ス」と註記していますから、上西郷村で西郷局はこのように伝えられていたのです。

一方、『寛政重修諸家譜』では、西郷局は上西郷村の戸塚忠春の娘として生まれ、忠春死後に服部（蓑）正尚の養女となり、三河の西郷義勝に嫁したのですが義勝が戦死。その後義勝の叔父西郷清員の養女として徳川家

<sup>45</sup> 前掲『掛川誌稿 全翻刻』四十～四十三頁。

康の側室となったとされています。

また、山本忠英は「附録」で、徳川家の妻妾などをまとめた『以貴小伝』に基づいて西郷局について記していますが、『以貴小伝』の西郷局の記事は『寛政重修諸家譜』に基づいているのです。

前述のように茂先は『寛政重修諸家譜』編纂に提出する太田氏の系譜に関わったと考えられるのですが、なぜ『寛政重修諸家譜』の西郷氏の系譜を参照しなかったのでしょうか。同書は茂先が文化十二年（一八一五）に亡くなる前の同九年に完成しているのですから、屋代弘賢あるいは松崎慊堂―林述斎といったルートを使えば、一藩士である茂先でも閲覧は可能だったでしょう。なお、『以貴小伝』は成立年が不明で、茂先の生前に同書があったかどうかはわかりません。

では、なぜ茂先は『寛政重修諸家譜』を参照しなかったのでしょうか。おそらく茂先も同書の西郷局の記述について耳にする機会があったでしょう。とすれば『掛川誌稿』の記述を書き直そうと考えていたところ、公務や書道研究に時間を割いているうちに病に倒れて亡くなってしまったのではないかと推測します。

西郷局の出自については、拙稿「西郷局の出自と構江屋敷に関する一考察」<sup>4,6</sup>で、西郷氏とは関係なく『寛政重修諸家譜』や『以貴小伝』が記している内容は誤りであることを明らかにしています。

### おわりに

齋田茂先は『公家譜牒』編纂のために各方面から史料の入手に尽力し、また、巡村調査などで得られた詳細な知見を『掛川誌稿』巻一―巻六までにまとめるなど、太田家や佐野郡の研究に大きな役割を果たしました。

もちろん現在からみれば史料批判など十分でない点も少なくないのですが、研究の積み重ねがほとんどない時代における茂先らの研究は、郷土史などの研究の先駆けとして現在でも参照すべき点が数多くあるといってい

<sup>4,6</sup> 『静岡産業大学情報学部研究紀要 一八号』（二〇一六年）所収。

茂先は前稿でみたように書道研究にも熱心で、手掛けていたいくつもの仕事を残して四十二歳で病に倒れて立ち上がる事ができませんでした。本稿でみた歴史研究でも『掛川誌稿』が未完成のままでしたから、その無念さは想像するに余りあります。

茂先がせめて六十歳頃まで生きることができたなら、書道や歴史の研究にさらに大きな成果を挙げ、全国的にも名を知られる学者になっていたことでしょう。

(了)